

甲府市を中心に見た 山梨県方言の仮定表現に関する調査研究

——「見ロバ」「出ロバ」などの言い方について（上）——

秋 山 洋 一
本学方言調査会

1 序

この調査の本来の目的は、山梨方言の特色ある諸現象について、それらの使用分布のみならず、地域差や年代差をも含めた使用状況を明らかにしようとするものである。本稿はその中間報告として、いわゆる仮定表現（条件句を含む）のうち、「見ロバ」「出ロバ」「シロバ」など、活用語が助詞「バ」に続く時に現われる「—oba」という語形（以下「—oba 形」とも言う）をとりあげ、それを甲府市の場合について臨地調査した結果の一部をまとめたものである。

本調査は、本学（山梨県立女子短大）の方言ゼミ（秋山洋一指導）の学生が中心となって、昭和55年以来毎年実施しているが、甲府市については昭和60・62年に中・高年層を対象にアンケートによる調査を行い、63年には若年層をも加えて全て方言話者から直接聞き取る臨地調査法によって再調査を行った。全県分布調査についても同様である。

甲府市は言うまでもなく、県都として政治・文化の中心地であり、総人口の約 $\frac{1}{4}$ がここに集まっている。また、その周辺の町村はいわゆるベッドタウンとして人口が急増しつつある。従って、甲府市およびその周辺地域は、言語の共通語化といった面に於ても、今後中核的な存在となるであろうことが予想される。その意味で、まず、甲府市における実態を把握しておくことは、他地域を調査する際の比較の尺度となり得て便利である。今回甲府市を中心にとりあげた主たる理由はここにある。

折りしも、近日上梓された『甲府市史』の民俗編には、地方誌にしては詳細な方言解説が収められており、甲府市方言の基本的事項を大観せんとするに本書を参照して充分事足りることは言うを待たない所であるが、本稿に

おける報告事項が、この一連の調査目的からしても、結果として、部分的ではあるがそれをいわば補うような内容になっていることは、そこにささやかな意義が見出せて幸いである。

以下、本稿の内容は、「—oba 形」の全県分布の概要と甲府市における世代別使用状況の調査報告とが主な柱になっており、時に、他地域との比較や語史などについても言及できればと考えている。

2 調査事項及び調査方法

2-1 調査事項 仮定形に「—oba 形」が現われる活用語にはどんなものがあるかについて、例えば『甲府市史』民俗編によって見ると、動詞（上一段・下一段・カ変・サ変）・形容詞・助動詞（せる、させる、れる・られる、たい）などがあげられる。これは、他の市町村誌や方言概説書（『講座方言学』6所収の「山梨県の方言」など）とも一致する。

本稿はそれらを再確認することだけが目的ではなく、また、他県の場合との比較や分析等に資するためにも、ここでは、「—oba 形」をとらないとされている活用語も含めて調査を行うことにした。

即ち、まず、動詞では、「飲む」（五段）・「見ル」（上一段）・「開ケル」（下一段）・「スル・勉強スル」（サ変）・「来ル」（カ変）、形容詞では「暑イ」、形容動詞では「静カダ」、助動詞では、「言ワセル」（使役）・「言ワレル」（受身）・「出ラレル」（可能）・「言ワナイ」（否定）・「言イタイ」（希望）・「高イラシイ」（推定）・「同ジョウダ」（比況）・「降リソウダ」（様態）・「雨ダ」（断定）・「行ッテ見タ」（過去）などを中心にとりあげてみた。実際には、これらの活用語の仮定表現全般について調査したわけであるが、本稿では主に「—oba 形」をとる場合を中心に報告す

ることにする。

2-2 調査方法 a 調査票 調査票はアンケート調査用に作成されたものを補訂して使用した。例えばサ変の場合、「ソウスレバイイジャン。」のような文例をあげ、下線部について想定される語形をあらかじめ用意して、それらを話者に対して直接確認する質問形式をとった。

想定される語形はなるべくとりこぼしがないように、県内各地の方言報告書等を参考にして収集したものに、さらに、過去数年間の調査活動によって得られた語形をも加味したりするなどして万全を期すようにしたつもりである。

なお、語例の中には、言わないということを確認するために、想定されない語形というものも含めてある。また、使用率を出す関係上、普段よく使用する語形について確認をとることにしてある。

2-2b 被調査者 甲府市の場合は、市内在住者でいわゆる「生え抜き」とか「生いつき」の人のみを対象に選定した。全県調査の場合についても同様である。

各年代の区分は、A年代(75才以上)、B年代(65才以上)、C年代(55才以上)、D年代(45才以上)、E年代(10代の中学生)とし、各年代とも男女約20名ずつを選んだ。初期の調査とのつり合いをとるためにそれぞれ5才ずつくり上げてある。ここではA・B年代を高年層、C・D年代を中年層、E年代を若年層とする。

なお、「生え抜き」と判断したその最低条件は、その土地で生まれ、その土地で言語形成期を過ごした者ということである。

そして、可能な限り他の土地で生活した経験の無い人を選ぶように努力したが、この点に関しては、たとえ高年層であっても、若い時には仕事の関係で都会や他県での生活経験を持つ人が大部分で、中年層をも含めて完璧を期すことは不可能に近い。

また、人によって生活圏や生活内容や職業などが異なるため、それにつれて当然言語使用状況にも個人差が出て来る。こうした点を考慮して、極力平均的な使用状況を把握するために、甲府市の場合は各年代ごとに約20名ずつを選んだ。

全県分布調査の場合は、原則として一地点につき75才以上の人(A年代)を一人ずつ選んだ。この場合は、個人差がそのまま地図上に表わされるため、当該地点およびその周辺地域に退って言えば、特に「使わない」という証言は、それを一般化させて考えることは必ずしもできないが、より広範囲に見た場合には大まかな傾向をつかむことはできよう。

2-2c 調査地点 甲府市は南北に長い地形で、その北半分は山間地帯、南半分は住宅地帯となっている。南部住宅地帯はさらに市街地(北部)と農園地帯(南部)と

に分けることができようかと思う。市街地はあらゆる面で甲府市の一番の中心地である。

従って、今回の調査のように、年代別に使用状況の変化を見ようとする場合には、まずこの市街地に注目してその実態を把握してみたいと思う。即ち、北は千塚・湯村・武田通り周辺から、南は伊勢・住吉周辺のいわゆる甲府バイパス附近まで、中学校の通学区域の関係から東西については特に制限を付けなかったが、なるべく、荒川とJR身延線とに囲まれた地域に重点を置くようにした。

ところで、甲府市街地をとり囲む東西と南北の地域は、古くは西山梨郡と中巨摩郡とに所属する農村であったが、昭和29年(1954)までに十数ヶ村が甲府市に合併されている(『甲府市史』)。

そうした歴史を重視するならば、中央部(市街地)と東部・西部、および、北部・南部とは基本的に区別して調査にとりかかるのがよろしいかと思う。

しかし、その後およそ35年近くが経過し、その間の交通や各種産業の発展とそれにとまなう人口の増加などの社会的変化によって、特に市の中・南部は宅地化も進んで人的交流も活発になって来ている。そして、この傾向は甲府市に隣接している町村にまで及んでいる。

従って、この狭い甲府市の中での地域別による言語上の大きな差異というものは見出しにくくなっているようにも思える。ちなみに『甲府市史』における試みは、若松町(中央)・山城地区(南部)・黒平町(北部)・国玉町(東部)・新田町(西部)の五地点に分けての語法調査であったが、活用に関しては用言に少々のちがいは見られるものの大差は無く、また、助動詞については地区間の差異を見出せないという結果を出している。音韻調査に関しては特に地域別の差異については触れていない。

昭和61年に本学で実施した調査は、甲府市に隣接する町村が対象であったが、その時には、甲府市北部山間地帯と南部農園地域は甲府市周辺地域の中に含めてそれらといわば同列に扱ってみた。これは、もし、差異があるとすれば、それは甲府市街地対その周辺の町村のそれと同じ程度のものであろうという考え方によるものであった。アンケート調査法ではあるが、大差は無いという結果であった。ところが、使用率を比較してみると数字の上にはそれなりにはっきりとした差が表われていた。今回の市街地の調査はその辺を明確に確認するためのステップのつもりである。

次に、全県分布調査の場合は、調査地点がほぼ平均になるように選んだが、地域によってはやや詳しく見ようとして地点を増やした所がある。奥多摩湖近辺と河口湖周辺とがそれである。ただし、分布地図上には、国中地方(東海東山方言地域)39地点、郡内地方(関東方言地

域) 21地点、都合60地点のみを表示した。

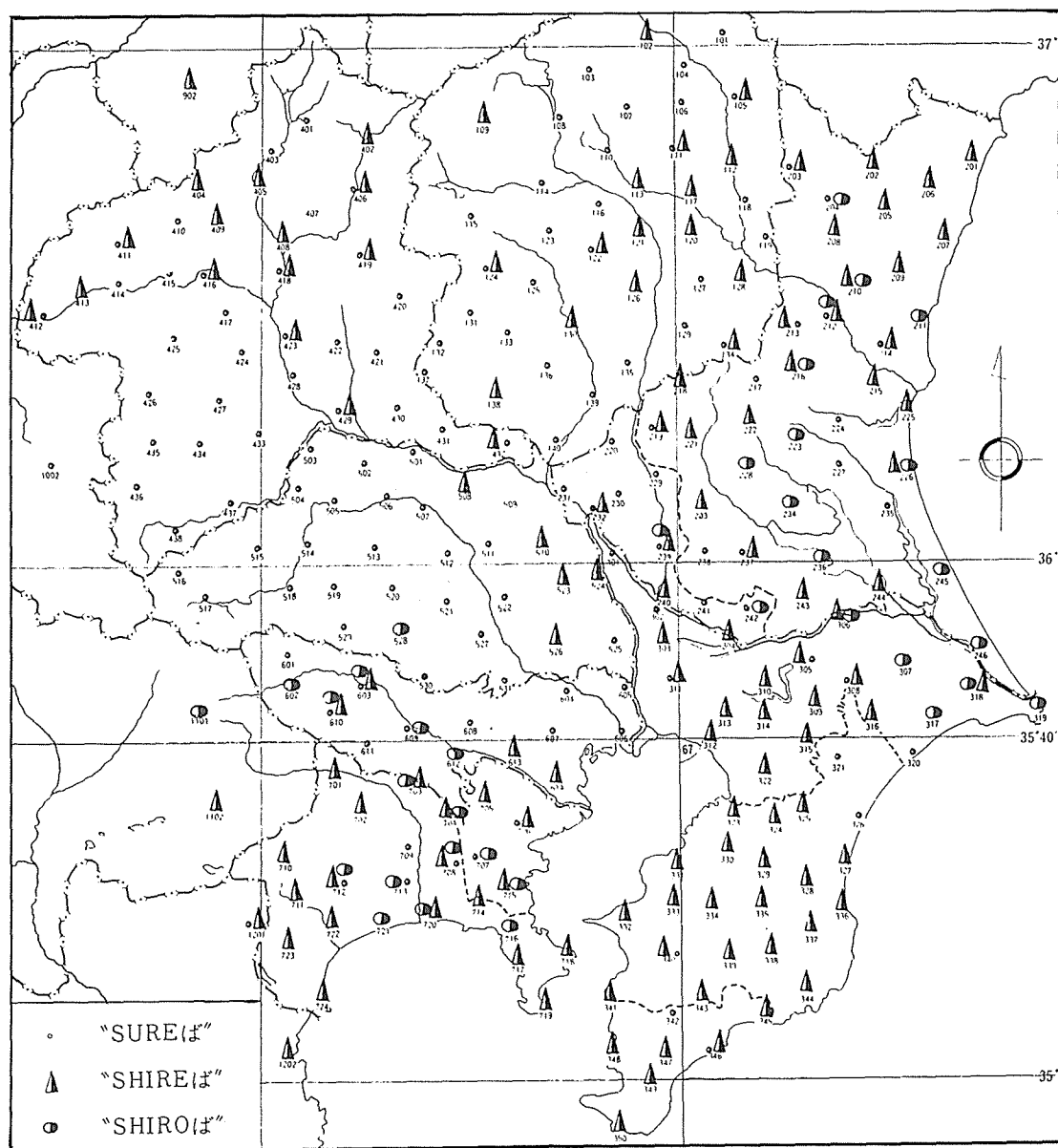
3 全県分布の概要

3-1 [一oba形]の分布域 一部の活用語の假定形が「一eba」ではなくて「一oba」となる現象は、関東地方域では、東部と西南部と山梨県国中地方(東海東山方言域)とにまとまってその分布が見られるようである。

『関東地方域方言事象分布地図—表現法篇』(大橋1976)によって見ると、サ変の「スレバ」を「シロバ」、カ変の「来レバ」を「コーバ」(又は「キロボ」と言う地域は、

茨城県の北部と南部一帯、千葉県北東部(香取郡・銚子市一帯)、埼玉県入間地方、東京都多摩地方(西多摩・南多摩)、神奈川県相模川流域など都合36地点である。この地図には、山梨県では塩山市上小田原(国中地方)と都留市十日市場(郡内地方)の二地点が設けられていて、前者のみこの種の言い方の使用地点になっている。

また、下一段の「比べロバ」ではその使用地点は19地点とぐっと少なくなって、山梨県も不使用になっている。ただし、三宅島が一地点あげられている。助動詞「ナイ」(否定)では「降ラナケロバ」が埼玉県入間地方に二地点見られる。



「仲良くすれぱいいのに。」の「すれぱ」の分布図。大橋勝男「関東地方域方言事象分布地図」(1976・桜風社)による。

こうしてみると、山梨県をも含めた関東域の中央部を挟んだ東部と西部の両側に〔一oba形〕が分布しているという形になっていることがわかる。

そこで、山梨県全域のさらに詳しい分布状況はいかな

るものであるかを知るために、先の2-1で示したような調査項目を用意し、県下60地点の分布地図を作成しその概要を見てみることにする。なお、調査に当たっての詳細については前章に示した通りである。

調査地点一覧表

No.	調 査 地 点 名	地点番号	No.	調 査 地 点 名	地点番号
1	北巨摩郡須玉町小尾字御門	5684-70	31	西八代郡上九一色村本栖	6614-24
2	〃 大泉村谷戸	5683-85	32	〃 下部町大炊平	6613-29
3	〃 白州町下教米石	5683-92	33	南巨摩郡早川町薬袋	6613-54
4	東山梨郡三富村上釜口	5695-10	34	〃 身延町帯金字塩之沢	6613-68
5	北巨摩郡須玉町中小倉	5693-17	35	〃 〃 相又下	6613-96
6	甲府市上黒平	5694-13	36	〃 南部町上佐野	6624-10
7	塩山市高橋	5695-13	37	〃 〃 成島字宮之入	6623-27
8	北巨摩郡武川村柳沢	5693-24	38	〃 〃 井出	6623-59
9	東山梨郡牧丘町千野々宮	5694-48	39	〃 富沢町東根熊	6623-69
10	韮崎市穂坂町柳平	5693-59	40	北都留郡丹波山村丹波	5695-26
11	〃 清哲町青木	5693-66	41	〃 〃 鴨沢	5695-39
12	塩山市中萩原	5695-60	42	〃 小菅村金風呂	5695-49
13	山梨市市川	5694-77	43	〃 〃 池之尻	5695-47
14	甲府市上帯那	5694-72	44	〃 上野原町初戸	5696-92
15	東八代郡一宮町小城	6604-07	45	大月市七保町瀬戸字尾茂礼	5695-98
16	中巨摩郡芦安村芦倉字古屋敷	6603-15	46	北都留郡上野原町向風	6606-14
17	東山梨郡大和村水野田	6605-11	47	大月市真木町間明野	6605-25
18	甲府市中小河原	6604-23	48	〃 笹子町追分字新田	6605-42
19	中巨摩郡檜形町東吉田	6603-39	49	〃 猿橋町小沢	6605-65
20	東八代郡八代町高家	6604-36	50	南都留郡秋山村中野	6606-53
21	南巨摩郡増穂町平林字久保平	6603-56	51	都留市下大幡	6605-65
22	〃 早川町奈良田	6603-52	52	南都留郡河口湖町大石字中沢	6604-89
23	東八代郡御坂町字藤之木	6605-50	53	都留市小野	6605-86
24	〃 中道町右左口字七覚	6604-63	54	南都留郡道志村戸渡	6606-81
25	〃 芦川村中芦川	6604-66	55	〃 足和田村西湖	6604-98
26	西八代郡市川大門町八之尻字宮沢	6603-79	56	〃 勝山村勝山	6604-99
27	〃 上九一色村古関字本郷	6604-84	57	富士吉田市大明見	6615-02
28	〃 下部町大磯小磯字八王子	6614-01	58	南都留郡鳴沢村鳴沢	6614-18
29	南巨摩郡早川町新倉	6613-13	59	〃 忍野村内野	6615-24
30	〃 中富町上久成	6613-16	60	〃 山中湖村山中	6615-64

☆〔その他の調査地点〕南都留郡足和田村西湖西（根場）（6604-06）南都留郡河口湖町字河口（6605-80）同字船津（6615-00）富士吉田市松山（6615-11）南都留郡西桂町倉見（6605-84）

3-2 調査地点 甲府市方言の〔—oba 形〕使用の実態調査をまとめるに当たって、全県分布の概要を見てみようとして、県内65地点を選んで臨地調査を実施した。

調査地点一覧表によれば、国中地方39地点、郡内地方26地点ということになる。

調査した延べ人数は70名で、中には1地点につき2人調査した所もある。前述のように色々な意味でより適切な条件を持ち合わせている人の証言を採用しようとしたためである。被調査者は全部現地採用であるから、実際に訪問した人の数はその数倍になる。また、その年齢は前述のごとく、昭和63年(1988)9月現在で75才以上(A年代)ということで一貫させたが、どうしても適当な人が見つからないので、70才以上の線まで下げた所が4地点ある。本栖(31番)・塩之沢(34番)・尾茂礼(45番)・大石(52番)がそれである。

今回、一覧表のような調査地点を選んだ理由は、地点間隔が大よそ平均になるようにしたという以外に積極的な理由は無いが、奥多摩湖近辺の鴨沢(41)と金風呂(42)、および、河口湖周辺の勝山(56)・河口・船津・松山(富士吉田市内)、および、西湖西と西桂町倉見は、少々細かい分布を見てみようとして当初の予定に付け加えた所である。

鴨沢と金風呂は隣の東京都奥多摩町に近接していて、多波山・小菅二ヶ村全体の生活圏がむしろそちらの方に向いており、バス(西東京バス)はJR青梅線奥多摩駅から日に何本か往復している。また、特に景境は婚姻関係も東京都との結び付きが比較的強いようである⁽¹⁾。大橋1976の分布図によれば、その東京都西多摩郡は〔—oba 形〕の使用地域になっているのでその影響関係が気になる所である。なお、今回、奥多摩町川野(5696—30)で確認のための調査を行った。

また、河口湖、および、西湖周辺については国中地方の影響がどの程度あり、また、その範囲はどの辺あたりまでかを見ようとしたためである。

ただし、繁雑になるため、それらの全部を分布図に表わすことはせず、最小限の掲載にとどめた。

次に、調査地点の番号は国中地方は北から南へ順に1～39番とし、郡内地方は同じく40～60番とした。この番号は地図を見やすくするための仮番号で、正確な位置は国土地理院発行の25万分の1の地図に基づいて、六桁の数字で示した。(将来的には八桁にする予定である。)

なお、調査に当たっては、ゼミの学生は主に郡内地方を

まわったが、その際も指導者(秋山)が必ず同行して行った。また、国中地方の一部で卒業生諸姉(内藤里花・佐野みどり、岩間みゆき・吉原さかえ)の協力を得た。

3-3 分布地図 先に2-1で示した調査項目のうち、ここに地図化したものは次の九項目である。即ち、動詞ではサ変・カ変・上一段・下一段、形容詞、および、助動詞の「セル」(使役)・「レル」(受身)・「ナイ」(否定)・「タイ」(希望)である。

動詞五段活用・形容動詞・助動詞の「ヨウダ」「ソウダ」「ダ」「タ」についてはどの地点でも〔—oba 形〕を採用することはできなかった。また、比況の助動詞「ランシ」はほとんどの人が仮定形には「ヨウジャー」などの別な言い方を用い、「ランケレバ」という言い方そのものが通常の言語生活になじまないようであるのでこれも省略した。なお、助動詞「ラレル」は「レル」の分布とほとんど変わらなかったで、これは「レル」で代用することにした。細かなちがいはについては後述する。漢語サ変「勉強スレバ」も「スレバ」と全く同じである。

調査票に用意した例文は以下に示す通りであるが、実際に質問する時には、被調査者の理解を容易にするために、所々方言形をまじえたり、別の例文を用いたりして、なるべく回答をスムーズに引き出すよう工夫をした。

第1図 「そうすればうまくいくじゃん。」の「そうすれば」の言い方。

第2図 「早く来ればいいのに。」の「来れば」の言い方。

第3図 「地図を見ればわかるよ。」の「見れば」の言い方。

第4図 「窓を開ければ少しは涼しいよ。」の「開ければ」の言い方。

第5図 「暑ければ窓をあけようか。」の「暑ければ」の言い方。

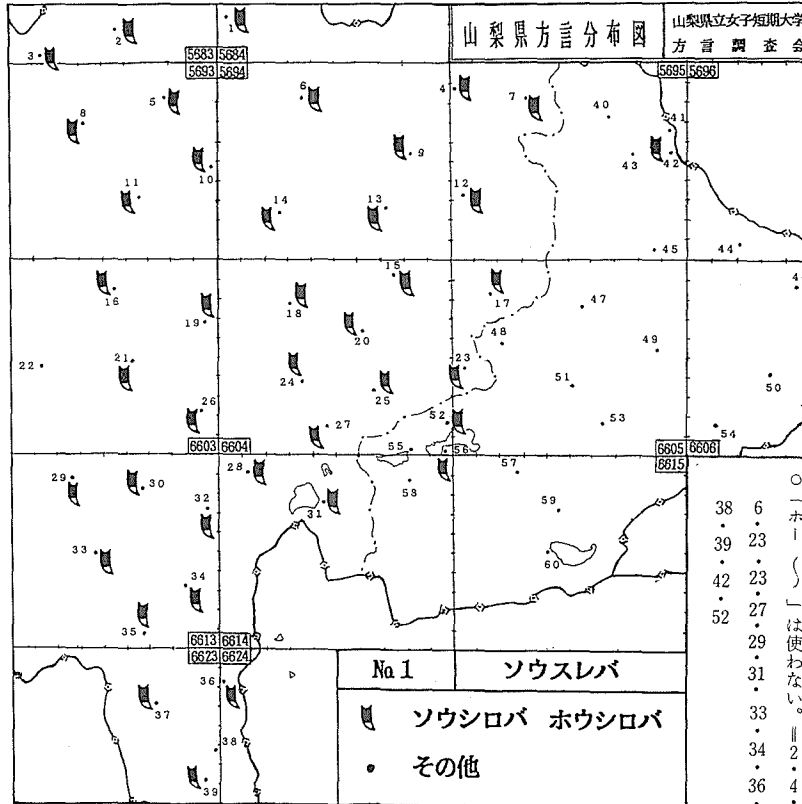
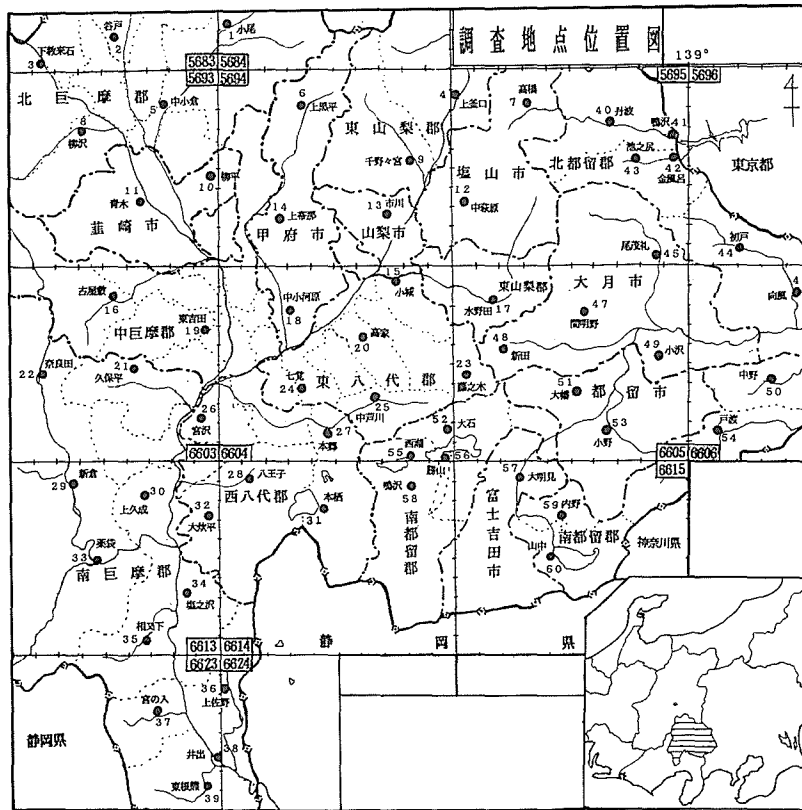
第6図 「私に言わせれば、それは無理だと思うね。」の「言わせれば」の言い方。

第7図 「そう言われれば、そんな気もするね。」の「言われれば」の言い方。

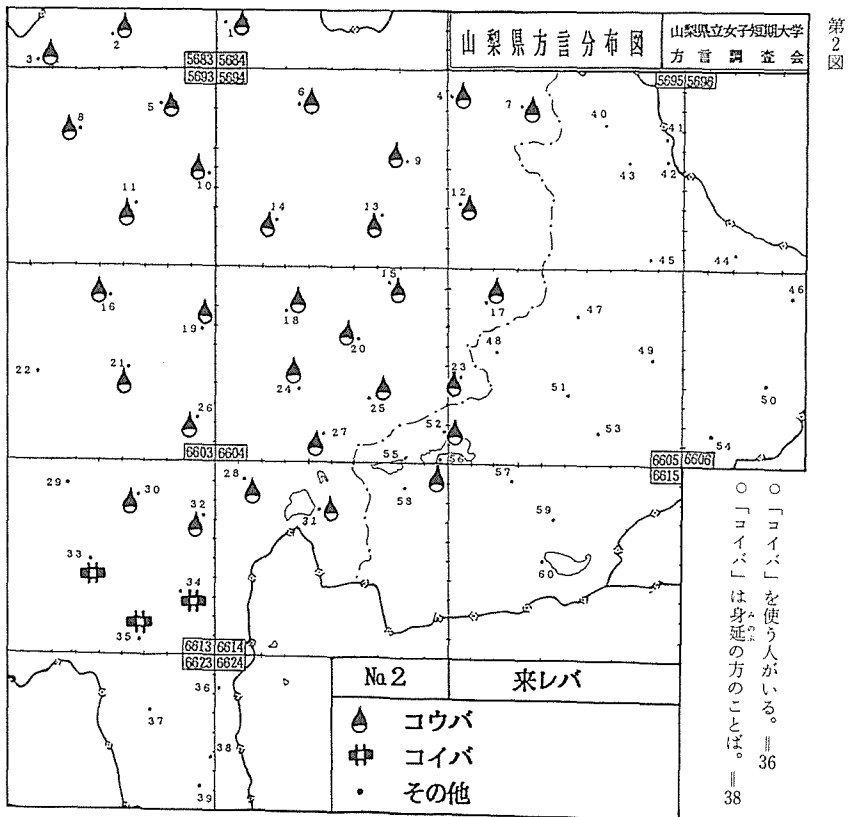
第8図 「はっきり言わなければわからないよ。」の「言わなければ」の言い方。

第9図 「そう言いたければ言いなさいよ。」の「言いたければ」の言い方。

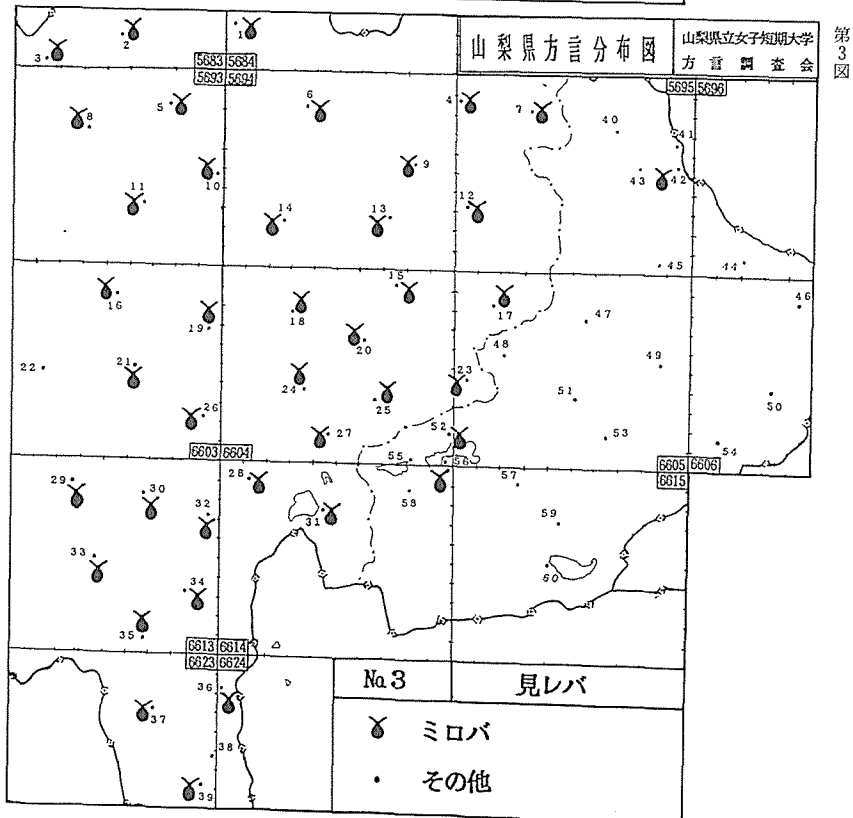
なお、前述のようにこれらの図は70才以上の高年層における使用分布図である。



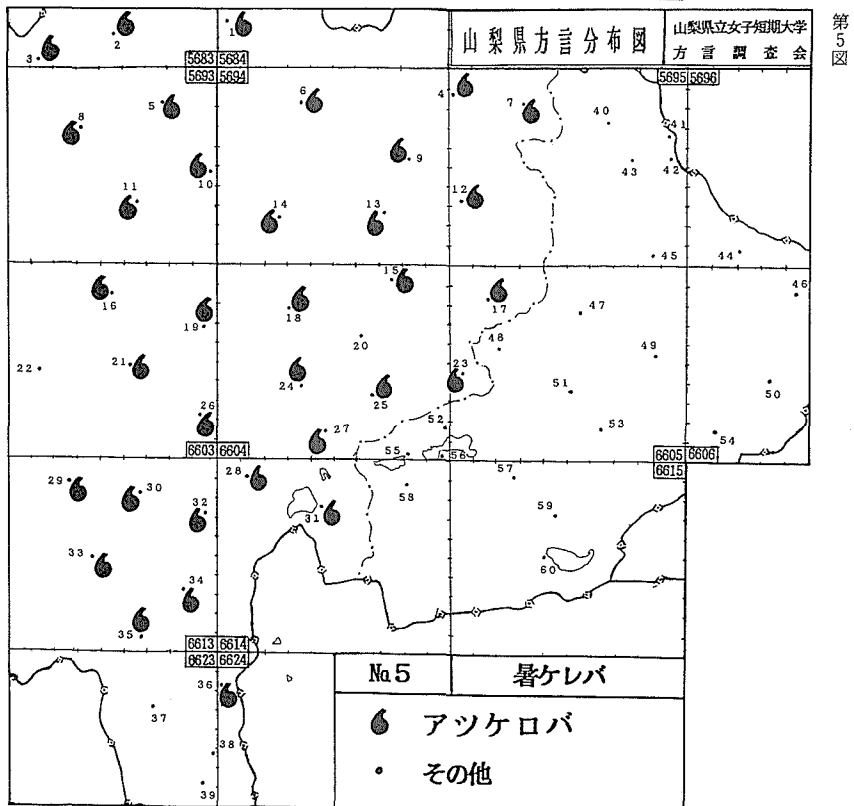
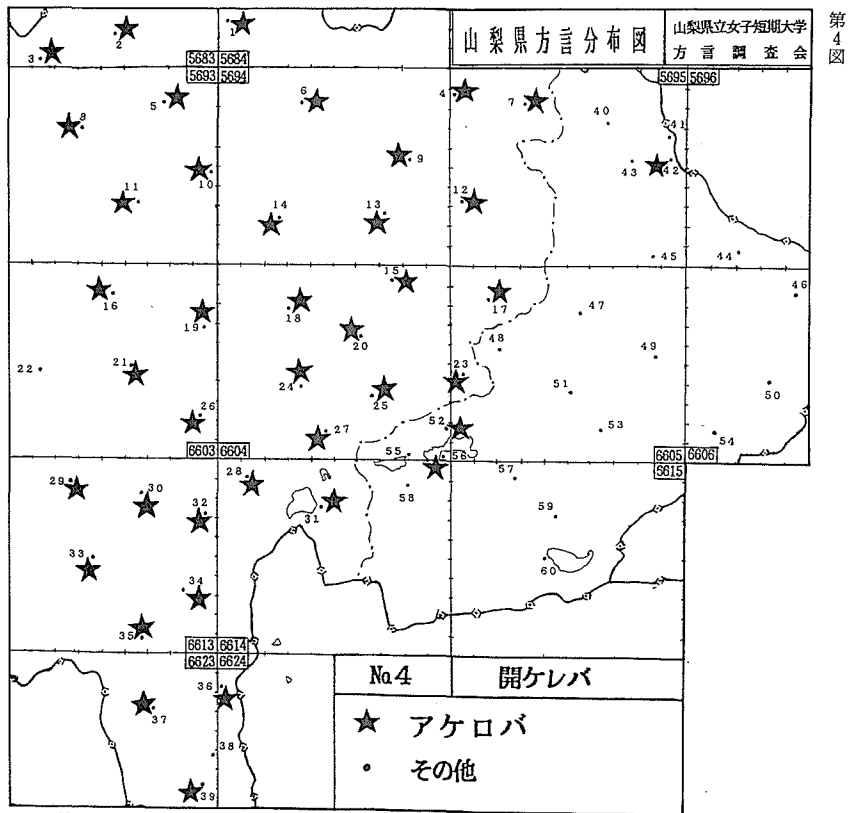
第1図

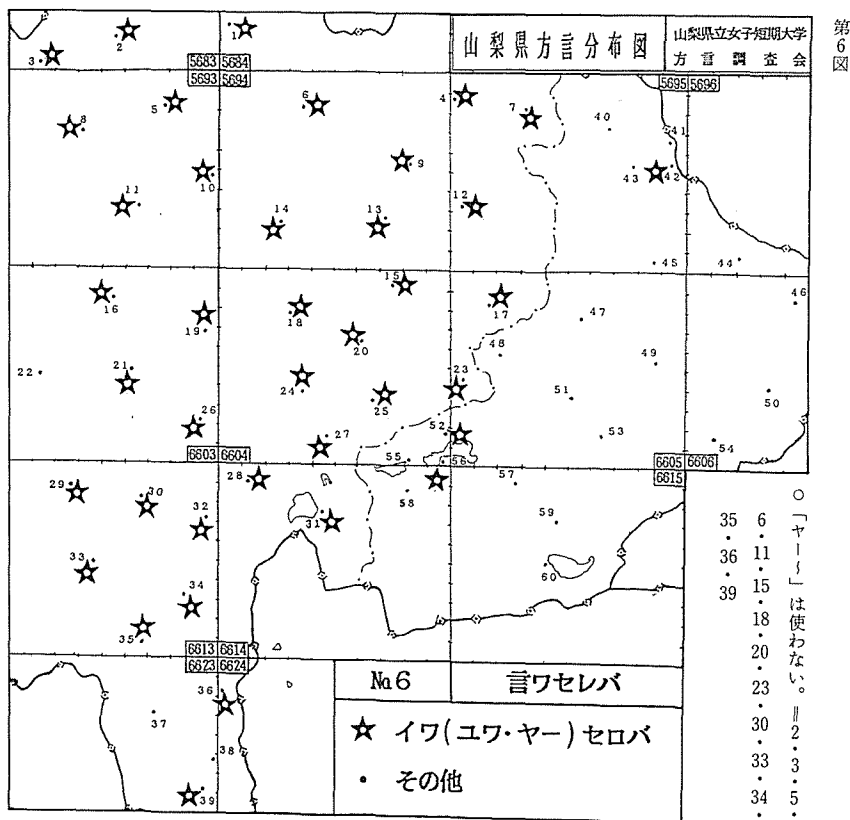


第2図

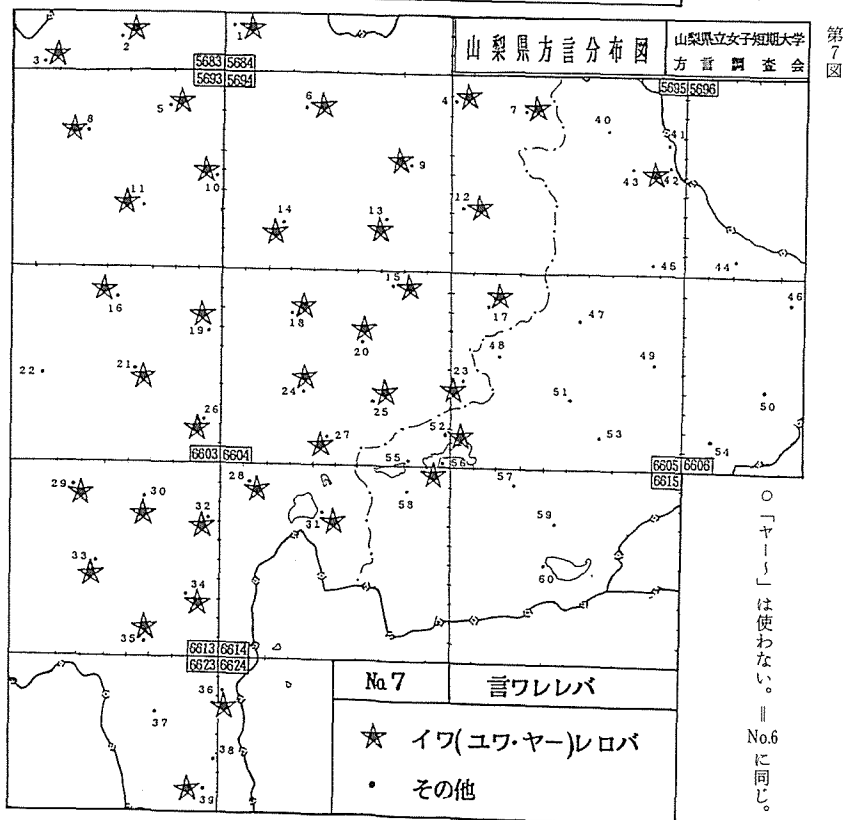


第3図

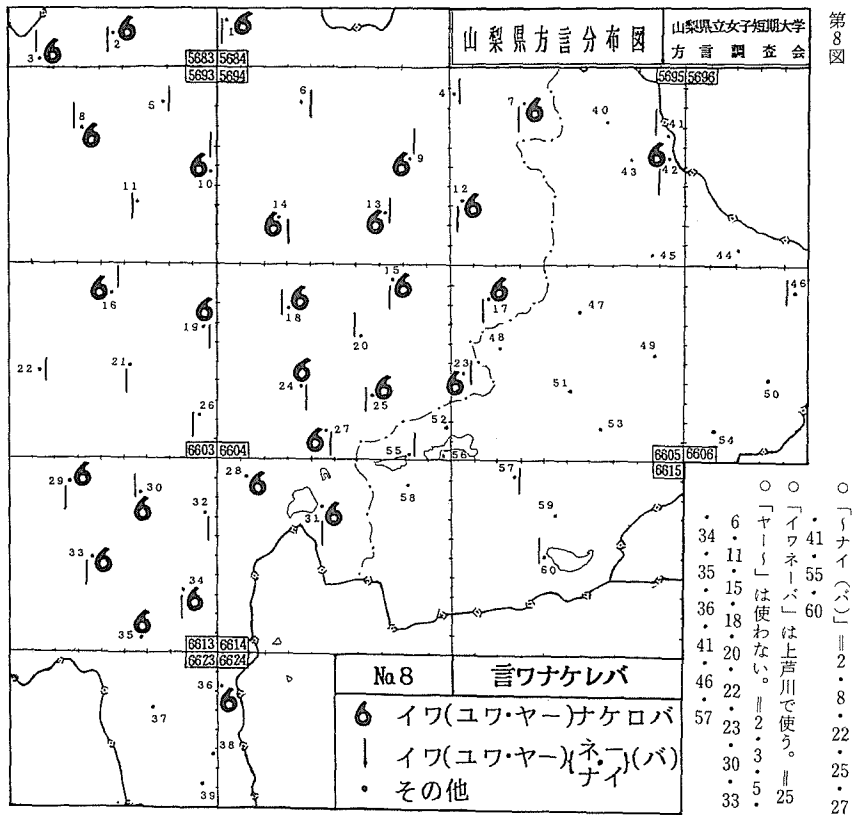




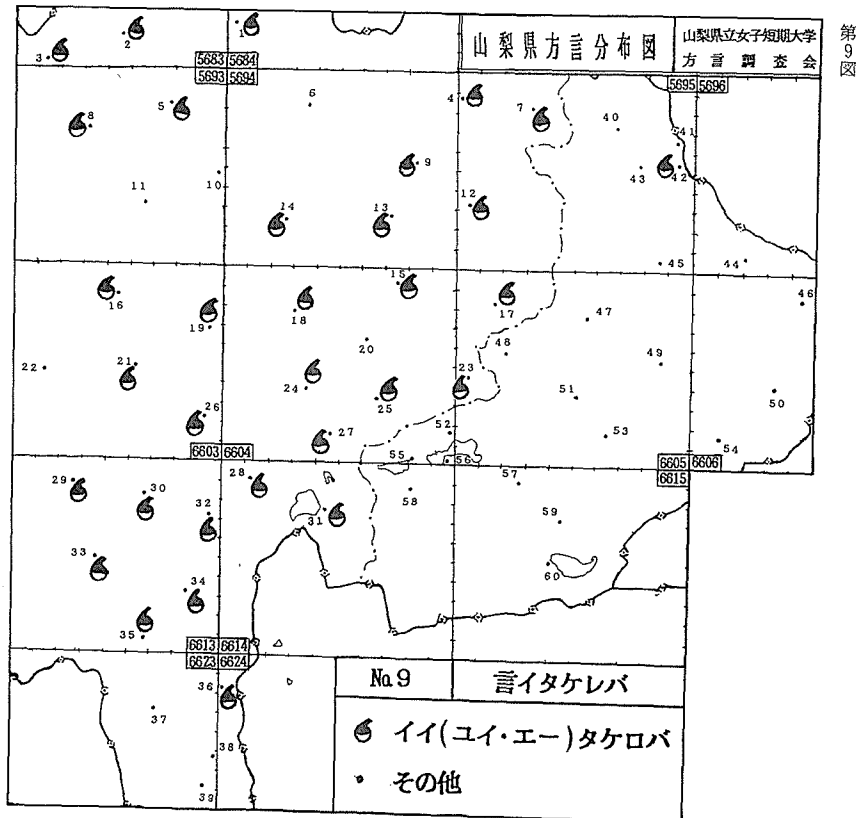
第6図



第7図



第8図



第9図

3-4 県内分布の概要 上記の分布図については見ての通りではあるが、ここで、それらをもふまえて今回の調査を簡単にまとめて、山梨県内の「-oba 形」分布の大きな傾向をさぐってみることにする。

まず、上記九図について、「-oba 形」を使用する地点を国中地方と郡内地方とに分けて集計してみると表 I のようになる。

表 I

		国中(39)	郡内(21)	計(60)
動詞	サ変 シロバ	37	3	40
	カ変 コーバ	30	2	32
	上一 見ロバ	37	3	40
	下一 開ケロバ	37	3	40
形容詞 暑ケロバ		34	0	34
助動詞	使役 言ワセロバ	36	3	39
	受身 言ワレロバ	36	3	39
	否定 言ワナケロバ	27	1	28
	希望 言イタケロバ	31	1	32

この表でも明らかなように、郡内地方は一部の地域を除いて、高年層についてはこの種の言い方がほとんど行

われていないということがわかる。また、品詞別に見ると、動詞のサ変・上一段・下一段、および、助動詞の「～セロバ」・「～レロバ」の使用域はほぼ国中地方の全域にわたっているのに対し、カ変の「コーバ」や、形容詞、および、助動詞の「～ナケロバ」・「～タケロバ」の使用は比較的に少なくなっている。調査地点を細かくするとさらにここらへんの差がもっと明確になって来るかもしれない。

さて、上記の分布図には表わさなかった事項をも含めて、地域をさらに細かく区分して、山梨県方言の仮定表現の「-oba 形」に関する高年層の用・不用の実態について、今回の調査で得られた事実をまとめてみたものが表 II である。

これによって見ると、「-oba 形」をよく使用する地域は、国中地方では、山梨・八代郡部全域と、巨摩郡部の北巨摩・中巨摩・南巨摩（北部・中部）一帯（34地点）であることがわかる。また、南巨摩南部地区（4地点）でも使用が認められるが、地点によって、また、使用範囲にも多少の差が見られる。特に井出（38）では全く証言がなかった。早川町奈良田でも同様であった。

一方、郡内地方は、その大部分（18地点）が不使用であり、また、西湖西や西桂町倉見や富士吉田市松山などを調べても同様の結果が出た。それに対して、わずかながら使用が認められた地域は、小菅村金風呂と河口

表 II

品 詞 地 域			用 言						助 動 詞									
			動 詞					形 容 詞	形 容 動 詞	せ る	れ る (受)	ら れ る (可)	な い	た い	よ う だ	そ う だ (様)	だ	た
			五 段	上 一 段	下 一 段	カ 変	サ 変											
国 中 地 方	山梨・八代郡部	甲 府 市 (3)	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	△	△	×	×	×	×
		東山梨地区(6)	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	△	○	×	×	×	×
		東八代地区(5)	×	○	○	○	○	△	×	○	○	○	△	△	×	×	×	×
		西八代地区(5)	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	△	○	×	×	×	×
	巨摩郡部	北巨摩地区(7)	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	△	△	×	×	×	×
		中巨摩地区(3)	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	△	○	×	×	×	×
		南巨摩中部(5)	×	○	○	△	○	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	×
		南巨摩南部(4)	×	△	△	×	△	△	×	△	△	△	△	△	×	×	×	×
		奈良田(1)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
		郡内地方	都留郡部	全 般 (17)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
奥多摩湖近辺(2)	×			△	△	×	△	×	×	△	△	△	△	△	×	×	×	×
河口湖周辺(2)	×			○	○	○	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×

(注) △印は回答が得られなかった地点が含まれていて、地域によってゆれがあることを示す。
()内は分布地図に示された調査地点の合計数。

湖周辺の大石と勝山の3地点だけであった。

金風呂の被調査者(男性・農業)は明治35年生まれの生え抜きであるが、母親が五日市町(東京都)出身ということであるから、あるいはその影響があったかもしれない。もう一人の女性(65才・農業・生え抜き)にも聞いてみたが、やはり「—oba形」の使用は認められた。

従って、さらに人数を多く当たれば、より確実性が増すのではないと思う。今後の課題としたい。

なお、丹波山村の鴨沢では不使用となっているが、ここでも人によってはあるいは使用が認められるかもしれない。ここには、橋一つ隔てた隣の町(奥多摩町)から嫁いで来ている人が多い所ようである。

河口湖周辺(河口湖町)と西湖周辺(鴨沢村)とは用・不用がはっきり分かれているようである。河口湖町の河口でも使用が認められる。この地は古くから鎌倉街道の宿場であったから、国中地方(土地の人は甲州と呼ぶ)との人の交流も多かったと思われる。ただし、河口湖町の中心地の船津の「生え抜き」には、使用が認められなかった。あるいは個人差があるかもしれない。

次に表IIを品詞別に再確認してみると、「—oba形」は、動詞の上一段・下一段・カ変・サ変・形容詞、および助動詞の「せる」「れる・られる」「ない」「たい」に現われ、動詞五段活用と形容動詞と助動詞の「ようだ」「そうだ」「だ」「た」には使用されないという結果であった。

また、カ変の「コーバ」という語形は、国中では早川町と身延町・南部町・富沢町には認められなかったが、薬袋(33)・塩之沢(34)・相又下(35)の3地点では「コイバ」という語形が得られた。既に町村誌等で報告されていることではあるが、さらに詳しい使用範囲を知りたいところである。

形容詞、および、形容詞型活用の助動詞の「ない」「たい」は仮定形に別の言い方が通用していて、「—oba形」

が採取しにくいようである。「暑カッタラ」「暑キヤー」「暑イジャー」などの語形がそれである。

第8図の「言ワナケレバ」の言い方では、「ヤーナケレバ」の他に、「イワネー(バ)」「ヤーネー(バ)」といった語形がわりと広く使われている。「イワナイ(バ)」も奈良田のみならず使用地域があちこちに点在していることがわかる。

こうしたことは、仮定表現全体の使用率の問題とも関係してくることになるので、本章ではこれ以上の言及はしないが、甲府市における調査ではそこらへんにも触れることになろうかと思う。

以上表IIで確認した諸点については、当然のことながら個人差ということ考慮に入れておかなければならない。従って、調査地点を多くして、さらに多くの証言(例証)を集めることによって、より確実性を高めて行くことが今後の課題である。

ところで、その前に、この種の現象に関する既発表の報告について触れておかなければならない。

今までに管見に入った山梨県方言に関する報告書類の中で、本稿で扱っている問題も含めて、特に語法面についての詳細な記述が見られるものを十種ほどあげて、それを表IIと比較してみたいと思う。こうすることによって、結果が重複している部分については、より客観性が増すことにもなる。表IIIにそれをまとめてみた。

まず、「—oba形」が現われる品詞については、形容詞や助動詞に多少のゆれが認められるものの、大部分が表IIと重複していると言えるが、助動詞の「ナイ」については表IIIではいずれも不使用になっている点だけが大きく相違している。前述の大橋1976の分布図には、埼玉県入間地方にも「降らなけろば」という語形の存在が確認されるところである。山梨県の場合は使用地点にゆれがあるものの、今回「言わなけろば」が28地点で確認でき

表 III

品 詞		用 言						助 動 詞										
		動 詞					形 容 詞	形 容 動 詞	さ せ る	ら れ る	な い	た い	ら し い	よ う だ (様)	だ	た		
		五 段	上 一 段	下 一 段	カ 変	サ 変												
報 告 書																		
国 立	全 体	講 座 方 言 学	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	○	—	×	×	×	×
	山 梨 ・ 八 代 郡	甲 府 市 史	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	○	—	×	×	×	×
		〈東八代〉 中 道 町 史	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
		〈東山梨〉 勝 沼 町 誌	×	○	○	○	○	×	×	×	—	×	×	—	×	×	×	×

中 地 方	巨 摩 郡 部	〈北巨摩〉 韮崎市誌	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	—	×	×	×	×
		〈中巨摩〉 白根町誌	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	—	×	×	×	×
		〈南巨摩〉 増穂町誌	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	○	—	×	×	×	×
		〈 〃 〉 南部町誌	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	—	×	×	×	×
		〈 〃 〉 奈良田の方言	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	—	×	×	×	×
		〈 〃 〉 西山村誌—湯島—	×	○	○	○	×	×	×	—	—	×	—	—	×	—	—	×
郡 内 地 方	南 部	〈南都留郡〉 講座方言学	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×	—	×	×	×	×
		〈 〃 〉 忍野村方言の研究	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

(注) 一印は仮定形の記述が無いものを示す。

た。先ほどの使用率の問題はあろうが、山梨県にもこの「～ナケロバ」という言い方の存在を認めてもよいのではないかと思う。

次に、使用地域についても、重複している地点が大部分であると言えようが、これも、南部町に関しては表Ⅱの結果と異なっている。被調査者の個性のちがいがこうした形で現われたのかもしれない。この近在での詳しい調査が課題となろうかと思う。

なお、『西山村誌』（『西山村総合調査報告書』と同じ）にも奈良田の方言が記述されているが、『奈良田の方言』の方が詳しいのでこれを採用した。いずれにも、奈良田については、〔一oba形〕使用の記述は見られないから、この地方では使われない語形と思われる。また、『講座方言学』の都留地方（郡内方言）の語法は、その注によると、西湖方言の語法⁽⁹⁾を参考にしたとあるので、表Ⅲでは一応分類上は南部に所属させておいたが、それが河口湖周辺も含まれるのであれば、表Ⅱと一致することになる。しかし、表Ⅱでは河口湖周辺は、品詞上の使用範囲がやや広がっている。あるいは、西湖近辺にもこの種の言い方が現在でも行われているのかもしれないので、今後、その点も確かめたいと思う。

以上、今回の調査で確認された点をもう一度まとめてみると次のようになる。

第一に、活用語の仮定形に〔一oba形〕が現われる品詞は、動詞では上一段・下一段・カ変・サ変、形容詞、および、助動詞の「せる」（使役）・「れる」（受身）・「られる」（可能）・「たい」（希望）であり、さらに新たに助動詞「ない」（否定）が加えられるということ。それに対し

て、五段活用動詞をはじめ、形容動詞、助動詞の「ようだ」「そうだ」「だ」「た」などにはそれが現われない。

第二に、〔一oba形〕の使用地域は、国中地方が中心で、中でも、中部・東部・北部・西部・南巨摩中部あたりが最もよく使われる。その他、南巨摩南部（南部町・富沢町）や郡内地方の河口湖周辺（大石・勝山・河口）、および、奥多摩湖近辺（金風呂）あたりでもその使用が認められる。それに対し、奈良田と南部町井出、および、郡内地方の大部分（都合22地点）ではその使用が全く確認できなかった⁽⁹⁾。

（1988年11月30日受理）

〔引用文献〕

- 『講座方言学』⑥中部地方の方言—4山梨県の方言— 稲垣正幸・清水茂夫 国書刊行会（1983）
- 『甲府市史』別編Ⅰ民俗 第4章第4節方言 稲垣正幸・清水茂夫・日向敏彦 りょうせい（1988）
- 『勝沼町誌』（方言語法担当）稲垣正幸 町誌刊行会編（1962）
- 『中道町史』（方言担当）望月健夫・小林是綱 町史編纂委員会編（1925）
- 『増穂町誌』（方言担当）清水茂夫 町誌編纂委員会編（1976）
- 『韮崎市誌』（方言担当）清水茂夫 町誌編纂委員会編（1979）
- 『白根町誌』（方言担当）清水茂夫 町誌編纂委員会編（1969）
- 『南部町誌』（方言担当）清水茂夫 町誌編纂委員会編（1964）
- 『奈良田の方言』〔甲斐民俗叢書3〕—奈良田ことば

の語法— 清水茂夫 山梨民俗の会 (1957)

- 『西山村誌』—西山村方言の語法— 渡辺寛弘・清水茂夫 (1960)

(『西山村総合調査報告書』—西山方言の語法— 県教育委員会 西山村総合学述調査団 1958に同じ)

- 『忍野村方言の研究』 『国文学論考』創刊号 都留文科大学方言研究会 (1964)

- 『関東地方方言事象分布地図』第二巻 表現法篇 大橋勝男 桜風社 (1976)

注1 『小菅村誌』『丹波山村誌』参照。

注2 清水茂夫「山梨県郡内方言について—西湖方言を中心に—」

(山梨県国語教育連合会『研究紀要』第四集・五集・〈1967・1968〉の西湖方言の語法の項)

注3 郡内地方に、過去どの程度の使用が見られたかについては、『口語法調査報告書』(国語調査委員会編・1906)や『方言矯正指導書』『山梨県方言の諸相』(羽田一成 1935)などにそれらしき記述が見られるが、それらについては後章で言及することにする。

〔調査参加者名〕

小泉直子 鈴木みゆき 高橋恵子 高橋淳子 田辺貴子 深沢ひろみ 向山香 (昭和63年度本学国文科2年次生)

〔付記〕

今回の調査にあたりご協力を得た数多くの方々に感謝申し上げます。 (文責・秋山)